

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです  
自分のできる仕事を見つける能力。性格が最初の差になる。

萩の街はいたるところに、いまだ美しい街並みを残しています。旧城下町として漂う風情は日本の凜としたあり方を教えてくれています。この萩で、私たち日本人が必ず見るべき情景があります。それは、市立明倫小学校の下駄箱です。萩の野村市長にぜひ一度見てみなさい。涙がでるほどの情景ですよと、教えられたのが、目にしたきっかけでした。旧藩校の流れを汲む市立明倫小学校。正面玄関をはいると、吉田松蔭先生の座像があります。その像の下を、制服姿の小学生たちが雑巾がけをしていました。

趣のある校舎は老朽化が進み、明倫小学校は隣接の新校舎へと移りました。旧校舎の佇まいは、松蔭先生の時代から変わらぬ、日本の精神を表しているように見えます。明倫小学校では毎朝、松蔭先生の言葉をクラスごとに全員で朗唱しています。最初の訪問時、その情景を、まず見ることにしました。

3年生のクラス、当番の男児と女児2人が教壇に立ちます。そして、当番さんの発声に続いて、全員が一斉に朗唱を始めました。「凡そ生まれた人ならば、宜しく人の禽獣に異なる所以を知るべし」可愛らしい声で、堂々と一文を朗唱。その後、なぜか涙が湧いてきます。この朗唱は、昭和56年に始められました。各学年ごとに学期一文ずつ、卒業までに18文を朗唱するということです。そして各学期の終業式では、学年ごとに声を揃えて朗唱するのです。一つの風情、情景が、人生のなかで一人の人間の励まし続け、岐路にたったときの励ましになることがあります。きっとこの子どもたちは、人生の局面局面で、この風景、この言葉を思い出すのだらうと思えました。

そして、下駄箱を見学しました。六年生から一年生まで、一寸の乱れもなく、踵を正面に向けて入れられています。一年生はたった二週間目、春4月のことです。

「今日よりぞ 幼心を打ち捨てて 人と成りにし 道を踏めかし」この言葉も、朗唱のなかに入っている松蔭先生の言葉です。これだけの下駄箱は、企業の現場にもありません。そう言うと、校長先生は笑顔でこう教えてくれました。「靴を揃えることが、まず覚えることだよ。まず君たち一年生のすべきことなんだ。心の美しさは、この下駄箱に表れるからね。そう教えることにしているんです」企業の現場でも思うのです。教育は環境かであると。では、まずその環境の第一は何でしょう。「指示されなくても、自分ができることを見つけてらよい。探せなければ、掃除でもいいよ」入社2年目の全体社員研修会。すでに時間は午後10時を回っています。100名を少し超える社員はだいぶ飽きていて、居眠りを始める人もいます。2日目の、船井先生との質疑応答、「何でも聞こう！」の時間。“上司の人たちはいつも出張に出ている、なかなか指示がもらえない。もっと体系的に仕事ができる環境づくりを！”そんな質問でした。少し間をおいての先生の答えは、眠気を飛ばしてくれるものでした。「はじめは何もできないよね。新入社員は。とすると、自分にできる仕事はないか？それを探すんだよ。掃除でも、電話をとるでも、何でもよいから」わかるかい？質疑応答の時間に、必ず質問に答えながら、そう確認しました。わかるかい？どんなつまらない質問にも、丁寧に答える船井先生はすごいなと、いまわかります。「できる仕事を発見する。それは、性格からくる能力だね。この発見する力の差が、社会人になって最初の差になるんだ」できる仕事をこなしているうちに、期待される仕事が出てくる。そのときが、一人前として成長する扉が開いたときなんだ。「計画的に仕事がこなせる会社になることも大切。少し考えてみますけどね」さあ、これで終わろう。ホッとした空気が会場に流れました。“今日よりぞ 幼心を打ち捨てて……”頭に刻み込んでいた松蔭先生の言葉が、なぜか頭に浮かんできました。

上司の人たちはいつも出張に出ている、なかなか指示がもらえない。もっと体系的に仕事ができる環境づくりを！”  
そんな質問に対して、船井先生は何と答えていますか？

( )